

IRISH CAFÉ

の

ご案内

- 講師： 風呂本武敏（元神戸大学教授）
- タイトル： 「アイルランドからのメッセージ」
- 日時： 2016年6月24日（金）
3：00～4：30（Talk、質疑応答）
4：30～ レセプション
- 場所： 学校法人城西大学
東京紀尾井町キャンパス 3号棟 5階
〒102-0093 東京都千代田区平河町 2-3-20
- 申込み・問い合わせ先： josai50@jiu.ac.jp（メール）
03-6238-1308（電話）
- 日本語で行います



「アイルランドからのメッセージ」

講師：風呂本武敏（元神戸大学教授）

日本におけるアイルランドへの関心の始まりは1920年前後にある。そこでは植民地経営という政治的関心と文学の関心が中心であった。文学では民話・伝説と演劇への関心が大きい。しかしそれらは英文学の亜流としての扱いで、より本格的な進展は二次大戦後になる。英文学研究でモダニストが大きな関心となったこと、歴史研究がアイルランド問題に本格的に取り組んだことが弾みをつけたが、同時にいずれも個人的な関心を学会的なまとまりとしたことと関係がある。

これらの変化はもちろんアイルランドが独立国として文化的にも独自性を主張するに足る実績を積み上げた20世紀後半からである。ゲール（ケルト）語保持の努力と並行して、借用語としての英語が自己確認の手段として有効性を発揮したこととも関係がある。しかしもう少し詳しく見れば、この小さな国がケルト族の国として、紀元前からの文化的古層を蓄積しその伝統を保持してきた結果でもある。このケルト的伝統には、今に残る石の文化、工芸品に見る連続と抽象の文様、非文字の伝統としての語りの伝統が挙げられる。それらとの類似性が日本文化にも見出されるのが日本人にも魅力となるさらなる要素である。輪廻転生の思想、変身譚、連続文様などがそれである。

こうした伝統は重なる外部勢力の侵入に耐えながら、二重性のある文化、つまり民族・宗教・言語のいずれにおいても多元的要素を育んできた文化の豊かさに関係する。二重性にはケルトとアングロ・サクソンの対立だけでなく、旧英国人と新英国人の対立、カトリックと英国国教会、さらにスコットランド系長老派教会など宗派的対立も複雑に絡み合う歴史が含まれている。これがまた20世紀後半の世界的要求となった多元的価値に向けて、一方で新しいアイルランド自身の独自の歴史の発掘となり、他方では世界共通の普遍的な問題提起の役割を果たすこととなる。例えば脱中心の価値観や女性解放の新たな一步を付け加えることである。

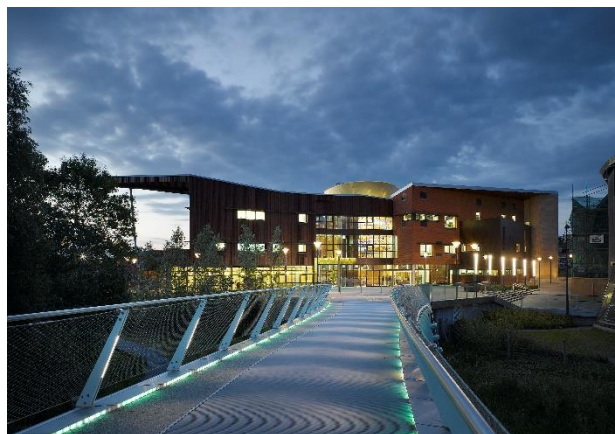
京都大学文学部 （1958卒 修士1960年）
元神戸大学教授、元愛知学院大学教授
国際アイルランド文学協会（IASIL）
日本支部元会長

招待講演 国際イエイツ夏季セミナー（スライゴ）講師 （1995年8月）
韓国イエイツ協会（ソウル）講師
（1993年5月、1996年10月、1999年10月）

著作 『見えないものを見る力』（春風社）2006
『半歩の文化論』（溪水社）2002
『W. H. オーデンとその仲間たち』（京都修学社）1996

共訳 『イエイツ戯曲集』（山口書店）1980
『ヒーニー；言葉の力』（国文社）1997

編著 『土居光知－工藤好美氏宛 書簡集』（溪水社）1998
『アイルランド・ケルトを学ぶ人のために』（世界思想社）2009



リメリック大学キャンパス リビングブリッジ